特別記事

バーデン=バーデン祝祭劇場がオンラインで音楽祭

——2月17～20日の4日間にわたって配信

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka
Photo=Andrea Kremper

コロナ禍のなか、昨年からオンラインでの音楽祭があちらこちらで見られるようになってきたが、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の「イースター音楽祭」で知られるドイツのバーデン=バーデン祝祭劇場も、「ハウス・フェスティヴァル」の開催を発表、2月中旬に配信した。

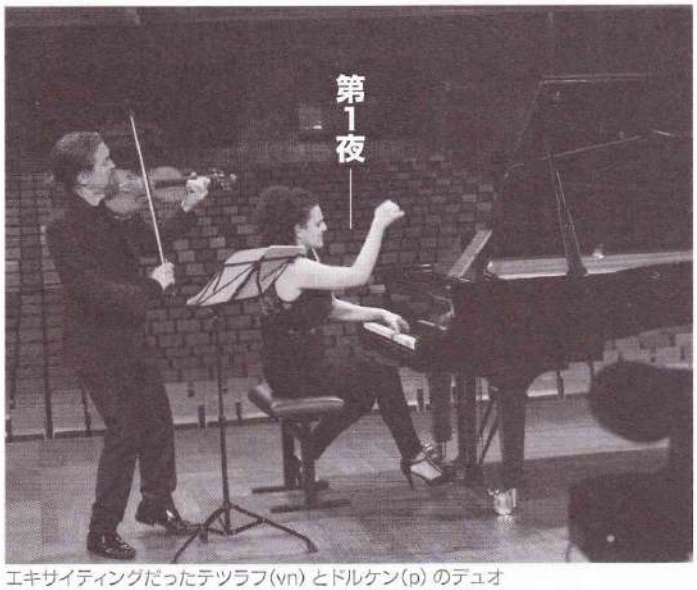
ライヴ・コンサートと同じ一期一会

魔の2020年が終わってもなかなか通常公演への展望が開けない苦境を打開するように、また一つ、記憶すべきフェスティヴァルが実現された。ドイツのバーデン=バーデン祝祭劇場は、2月17日にオンライン記者会見を開いて「ハウス・フェスティヴァル」の開催を発表し、その日から4夜連続で聴衆にライヴ配信を届けたのだ。

「ライヴ配信のみで、その後は2度と観られないという、ライヴ・コンサートと同じ一期一会の瞬間を重視した」とベネディクト・シュタンパ総裁が語る。

今回の企画が成功したのは、最初から司会者を添えたフォーマル感と、開演前に祝祭劇場入り口でプライヴェート感覚のミニ・インタヴュー録画を流し、演奏後に視聴者からリアルタイムで寄せられた質問に答える形態を取った構成も功を奏しているだろう。コロナ禍で諦めなければならない距離的臨場感の代わりに、ヴァーチャルの世界の長所を生かし、親近感を演出することに成功したからだ。

HAUSFESTSPIEL - Live streaming from February 17th to 20th, 2021 from the Festspielhaus Baden-Baden



エキサイティングだったテツラフ(vn)とドルケン(p)のデュオ

第1夜——クリスティアン・テツラフ

昨年のコンサートがキャンセルとなってしまったクリスティアン・テツラフがトップバッターで登場した。彼は前日にもミニ・コンサートでJ・S・バッハを弾き、当日の午前中には学生のためのコンサートとチャット交流、そして夜にこのストリーミングという強行スケジュールを決行した。

ライヴ配信のプログラムはフランク「ヴァイオリン・ソナタ」。テツラフの優しい、ささやくようなヴァイオリンと、それを支えるキヴェリ・ドルケンの安定したピアノが耳に心地よい。テツラフはふだんラルス・フォークトとデュオを組んでいるが、その弟子だというドルケンとも「世代も性別も超えて波長が合う」とテツラフは開演前のインタヴューで語っている。第2楽章もドルケンが火を付け、テツラフが乗った感じだ。二人のアッチェレランドやクレッシェンドが効果を発揮し、クライマックスに昇っていくさまはエキサイティングだが、テツラフのヴァイオリンの音はストリーミングに向いていないのではないか。掠れた音も渋いのだが、広がらず、みずみずしさに欠ける。最終楽章でも線の細さが気になった。端正な演奏だが、パワフルではない。アゴーギグを駆使し、ドラマ性を十分に表現したピアノの牽引力、表現力が光った。

アンコールはベートーヴェン「ヴァイオリン・ソナタ第4番」の第2楽章だった。

第2夜——ユリアン・プレガルディエン

ユリアン・プレガルディエンはシューマン《詩人の恋》を連作歌曲として1曲ずつ歌い進めていくのではなく、全曲が映画の長い1シーンであるかのような壮大なドラマを創り上げた。冒頭ではナイーヴな性格描写が固く、甘いメロディ・ラインに身を委ねるたのしみを犠牲にしたが、〈ぼくは恨みはしない〉あたりから、その若者も男らしく成長し、ものすごいテンションで歌い急ぐ。次の曲も恨み節で終わり、どんどん形相も変わり、苦味走った男性となってツィクルスを終えた。ドイツリートとして、エリック・ル・サージュのピアノのみを伴い、ただ立って歌っているだけなのに、早送りの映画を観ているようなドラマ性に惹きつけられた。

演奏が終わってトークが始まると温和なプレガルディエンに戻り、フランス人のル・サージュにフランス語通訳をしてあげたり、子供の幼稚園での話などをしたりしている姿が生むギャップがまたお

もしろい。最後はシューマン18歳のときの作品《短い目覚め》で穏やかに終えた。

第3夜――ヴィジョン弦楽四重奏団

若い層やクラシック一辺倒でない聴衆も楽しめるプログラム。ハノーヴァーを起点に、第1ヴァイオリンのヤコブ・エンケ、第2ヴァイオリンのダニエル・シュトール、ヴィオラのサンダー・ステュアート、チェロのレオナルド・ディッセルホルストが2012年に結成したこのクァルテットは、自分たちをバンドと位置づけ、クラシック音楽を別の音楽様式と混ぜ合わせるのが自身の存在意義だと語る。ラヴェル「弦楽四重奏曲」ではその実力を見せつけながら、暗譜に立奏で丁々発止の演奏を聴かせ、ストリーミング向きだ。

第2部ではチェロでバスのような音を出す仕掛けを施し、4人とも弓で弦を叩いたり、マイクで声や息の音も効果音として使ったりしながら、照明やカメラのアングルもポップな演出で彼らのオリジナル曲を3曲聴かせた。

第4夜――オルガ・ペレチャッコ

産後3週間で舞台復帰というオルガ・ペレチャッコの驚異的なエネルギーに脱帽すると共に、そのみずみずしい声に驚いた。産後に得られたという「温かみのある色を出せるようになった新しい声」でチャイコフスキーも歌えるようになったことを喜び、「6つのロマンス」op38から〈騒がしい舞踏会で〉、「16の子供の歌」op54から〈小鳥〉、「7つのロマンス」op47から〈私は野の草ではなかったか〉、〈昼の光が満ちようと〉をしっとりと聴かせた。ピアノのマティアス・サムイルはベルリン音楽大学の卒業試験から共演しているという通り、安心感が伝わってきた。

後半のテーマは子守唄。妊娠中の昨年9月に9カ国語の子守唄35曲を録音したCDが近々発売されるという。まずは今年のバーデン＝バーデン復活祭音楽祭オペラ演目だった《マゼッパ》でマリアを歌うはずだったため、マリアの子守唄を聴かせ、全曲を聴きたいと思わせることに成功した（その後のオンライン記者会見で、新型コロナウイルス感染防止措置の緩和を待ち、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団がスペイン・ツアーに行くはずだった時期に復活祭音楽祭を移し、5月6、9日に演奏会形式で上演されると発表された）。その後モーツァルトの子守唄《ねむれよい子よ庭や牧場に》に続き、ブラジルの子守唄《星》でプログラムをしめくくった。トークの後のアンコールにガーシュウィン《ポーギーとベス》の〈サマータイム〉を歌ったが、これが上手にクロスオーバーな歌いかたをしており、驚かされた。これからのペレチャッコは要注目だ。

●

実際の復活祭期間4月1～5日にもまたデジタル・フェスティヴァルが開かれる（www.festspielhaus.de）。その実行力を讃えたい。

ドラマ性に惹きつけられたプレガルディエン（T）とル・サージュ（p）

とても楽しめたヴィジョン弦楽四重奏団

みずみずしい声に驚いたペレチャッコ（S）。ピアノはサムイル